

## 【①表現内容—B：表現材料】

### ■革工芸

#### —レザークラフトの小皿—

##### ●題材について

小学校の図画工作と中学校の美術を比べると、中学校の美術は画一的で、あまり楽しくはないという意見がある。確かに小学校の教科書を見るとカラフルで明るく、だれでもがどんなことでもできるような雰囲気を感じさせてくれる。この魅力は何よりも大切で、活動への意欲を喚起させられる。

中学校はというと、もちろんすべてではないが、依然として生徒に活動を任せきりだったり、あまりにも自由な作品づくりや展覧会を優先した作品至上主義に陥ったりしている様子が散見できる。これでは、美術教育というより芸術表現に偏った授業になってしまい、一部の生徒の満足しか得られず、結果的に楽しくないという批判を受けてしまう。

特に、この年代の生徒は、表現することに対する苦手意識が芽生え、小学生の時のような思い切りのよい表現がなかなかできなくなり、なおさら楽しいという思いは遠のいてしまう。

そこで、本題材を展開することで、美術の表現とは何なのか、生徒にどんな力を身に付けさせたいかを改めて考え直す機会とした。そして、生徒が成就感や達成感を持ち、生徒全員が作品を完成し、「楽しかった」と実感して自信を持つことを第一に考えて実践した。

##### ●なぜレザークラフトなのか

デザイン・工芸の領域の授業に革を用いた理由は、小学校での既習経験がなく、素材そのものが自然な風合い持ち、とても魅力的だからである。

また、授業にはあまり使われていないけれども、革は、スポーツシューズやボールといった身近な生活の中に存在し、親しみが持てる。さらに、革の特性といった新鮮な知識を得られること、刻印を打つ技術が比較的容易で、だれでも習得できること、卒業後も革製品を使ったり飾ったり、あるいは、制作することができるといったよさがある。

##### ●制作時間短縮の工夫—構成の学習—

1年間に、できるだけ多くの表現や鑑賞活動を展開したいという願いと授業時数とのジレンマは永遠の課題である。本校でも多くの表現活動を展開するため、本題材では、できるだけ作業時間を短縮し、なおかつ効果的な表現を行うために、革のデザインは既成の形を構成することにした。こうすることで、デザインに時間をかけ過ぎる弊害を取り除き、打ち込みに時間を費やして、染料で着色する時間を含めて1学期10週で終了させることが可能になった。



### ●指導目標

#### ①美術への関心・意欲・態度

- ・革の素材の魅力を感じ、革を大切にしながら刻印を打ち、イメージを形に表そうとする。
- ・他の作品について関心を持ち、そのよさを学ぼうとする。

#### ②発想や構想の能力

- ・構成の基礎や美の秩序を考え、形を構成する。
- ・革の特性を生かした構成を工夫する。

#### ③創造的な技能

- ・線の表し方を工夫し、いろいろな表現方法を使って形を表そうとする。
- ・スィーベルカッターや刻印を適切に使用する。

#### ④鑑賞の能力

- ・互いのデザインや完成した作品を鑑賞し、よさを発見することで、自作や制作の意欲につなげる。
- ・工芸品や日用品の条件、生活の中の革製品、革の性質、構成の基礎や美の秩序を理解する。

おくやまこうおう  
(奥山拓央：千葉県流山市立北部中学校教諭)